

上宮太子、天下すこしざはりありし時、神代、佛在所の吉例に任て、六十六番の物まねを、彼河勝におほせて、おなじく六十六番の面を御作にて、即河勝にあたへたまふ。橋の大裏のししん殿にてこれを勤む。天下おさまり國しづかなり。上宮太子、末代の爲、神樂なりしを、神といふ字の片をのけて、つくりをのこし給ふ。これ日よみの申なるがゆえに、申樂と名附。則たのしみを申によりてなり。又は、神樂をわくればなり。彼河勝、欽明・敏達・用明・崇峻・推古・上宮太子につかへたてまつり、この藝をば子孫につたへて、化人跡をとめぬによりて、攝津國難波の浦より、うつほ船にのりて、風にまかせて西海に出づ。播磨國、坂越の浦につく。浦人舟をあげて見れば、形人間にかはれり。諸人につきたりてきずきをなす、則神と崇めて國豊也。おうきにある、とかきて大荒大明神と名附く、今の代に靈驗あらたなり。本地毘沙門天王にてまします。上宮太子、守屋の逆臣をたいらげ給し時も、かの河勝が神通方便の手にかゝりて、守屋はうせぬと、云々。

〔考異〕(一)さんなんなり——宗節本、さいたんなり。(二)形人間にかはれり——形人にかはれり。

〔口譯〕日本國に於ては、欽明天皇の御代に、大和國泊瀬川に洪水があつた際に、河上から一つの壺が流れ下つた。それを、三輪の杉の鳥居のあたりで、殿上人が拾ひ上げた。見ると中に嬰兒がある。其の容貌誠に柔和で玉の如き兒であつた。これは天降つた者だといふので、禁裡へ此由を申上げた。其の夜、天皇の御夢にこの

嬰兒があらはれて申上るには「私は支那の秦の始皇帝の三男(再誕——宗本)である。日本國に機縁があつて、今ここに現はれたのだ」といつた。天皇は奇異なことだと御考へになり、宮中へ御召しにられた。この兒は、成人するに従つて、才智拔群で、年十五歳で大臣の位に昇つた。帝からは秦といふ姓を下された。秦といふ字は、はたであるから、秦河勝がこれである。聖德太子の御頃、天下に少し障りがあつた際、太子は神代や天竺に於ける吉例に従つて、六十六番の物真似をするやうに河勝に御下命になり、又六十六番の面を御自作になつて、河勝に御授けなされた。河勝はその物真似を橋の内裏の紫宸殿に於て勤めた所、天下が治まり國土安穩となつた。そこで、聖德太子は後世の爲にこれを傳へられ、元來は神樂であつたのを、神といふ字の偏を除いて、旁を残して申樂とせられた。申の字は曆の方でいふと申であるから、申樂(さるがく)と名付けられた。これは「樂を申す」といふ義でもあり、又、神樂を分けた(偏と旁とを分けた)ことにも依るのである。

河勝は欽明・敏達・用明・崇峻・推古の帝から上宮太子にまで歴仕し、この申樂の藝をば子孫に傳へ、自分は「化人跡を留めぬ」といふわけで、攝津國難波の浦からうつほ船に乗つて風のまにまに西海へと赴いた。そして播磨國の坂越の海岸に漂着した。浦人が不審に思つて、その船をあげて見ると、普通の人間とは變つた物